研究論文

「在日」とエスニシティ（1）

Koreans in Japan and Their Ethnicity（1）

朴　　浩　烈*
Horyol PAK

Abstract：There are some ethnic groups in Japan. Their self-consciousness and identity such as language, blood relationship, culture, and recognition of history are often different from the dominant group in the society. Koreans belong among the big ethnic groups in Japan. I will consider their ethnicity as the psychological and social phenomenon, depending on questionnaires and hearing investigations in this report.

Keywords：language, eating habit, recognition of history, nationality, blood relationship, ceremonial occasion, school, name, folk costume

1．研究の目的と対象と方法、そして「エスニシティ」

最近、日本国内において人口減少社会（労働力人口の減少）に伴う国力と地方の衰退を見据え、外国人労働者増加問題や移民政策などをめぐって活発な議論が展開されているが、日本政府は新成長戦略として外国人労働者（技能実習生の増加、家事および介護に従事する外国人など）の受け入れを決定した[1]。サービス業や製造業における外国人労働者の比重が益々大きくなると予見される。

彼らとの相互理解と信頼関係を構築するためには日本人とは違いがあるという前提のもと、基本的人権に立脚した他者認識と多文化社会に関する議論を深めるための「エスニシティ」研究は欠かせない。現在200万人以上の外国人、先住民族であるアイヌをはじめとするエスニック・マイノリティが生活している現状から、現在を抜きに未来を語っても空虚な議論にならざるを得ない[2]。そこで本稿では戦前からつい最近まで最大のエスニック集団であった在日コリ

* 多摩大学経営情報学部　School of Management and Information Sciences, Tama University

[1] 2040年までには日本全国の1,800市区町村の約半分が自然消滅する可能性があるとの推計がある。

[2] 浜松市の小学校教諭が担任の生徒である外国籍児童に「国へ帰れ／ここから飛び降りるか」と脅迫し腕を掴んで転倒させるなどの行為を繰り返していたこと（2014年8月14日浜松市教育員会発表）、自民党所属の金子快之札幌市議が「アイヌ民族なんて、いまはもういない／アイヌであることを客観的に証明するすべはない」(2004年8月、自身のツイッターやホームページ）などと書きこんでいた問題は深刻な差別であり侮蔑である。

（原稿受理日　2013.10.29）

アンにおけるエスニシティを考察することを目的とする[3]。研究対象は朝鮮学校周辺コミュニティの在日である[4]。このコミュニティに属する人たちは、以下のような人たちである。

① 朝鮮学校生徒と卒業生、または卒業はしていないが学んだ経験を有する人たち
② 学校に子どもや親戚、知人の子どもが通っている大人たち
③ 朝鮮学校教職員とその家族親族
④ 学校を中心とした在日コミュニティとの付き合いがある人たち
⑤ 外国人（コンゴなど）と在日が結婚した家庭で民族教育に理解がある人たち

国籍も朝鮮、韓国、日本、そしてその他の外国籍と多様である。被調査者コミュニティには数は少ないものの中国朝鮮族の人たちや最近日本に渡ってきた韓国からのニューカマーの人たちも存在する。

朝鮮学校には現在、以下のような子どもたちが通っている。

a）在日どうしの間に生まれた子ども
b）在日と日本人の間に生まれた子ども
c）在日と韓国人の間に生まれた子ども
d）韓国人と日本人の間に生まれた子ども
e）在日と中国朝鮮族の間に生まれた子ども
f）在日と外国人（ロシア、ネパール人など）の間に生まれた子ども

研究はアンケートと聞き取り調査をもとに分析を行う。アンケートは2006年11月から2008年12月まで664人を対象に行い、聞き取り調査総数は60人である[5]。

アンケート内容は「在日にとって民族性の中で大切なのは（ことば、食生活、歴史認識、国籍、血筋、冠婚葬祭、学校、名前、民族衣装）の3つであると思われる。3つに○をつけてください。そしてその理由」である[6]。「その理由」は自由記述欄を設けて記入していただいた。

被調査者コミュニティにおけるエスニシティ（民族性）研究はおもに個別的インタビューが中心で、最新の研究としては、第14回（平成25年度）大阪大学課題研究奨励費研究成果報告書「朝鮮学校へのフィールドワークを中心とした在日コリアン・コミュニティ研究」がある

[3] 外国人登録者の数として2006年末まで在日韓国・朝鮮人（コリアン）が最大の構成比を占めていたが、その後は中国国籍者がトップ、在日コリアンがその次を占めている。

[4] このコミュニティにおけるバイリンガル能力を調査した研究として朴浩烈（2011）があるので参照されたい。

[5] 被調査者は①朝鮮大学校（外国語学部、文学歴史学部、経営学部、教育学部）に在籍する大学生329人と大学院生19人（計348人）、②朝鮮学校の教員91人（群馬朝鮮初中級学校、栃木朝鮮初中級学校、北海道朝鮮初中高級学校、千葉朝鮮初中級学校、東北朝鮮初中高級学校、東京第3初級学校、東京第4初中級学校、朝鮮大学校）、③群馬県、茨城県、宮城県、東京都、神奈川県、大阪府、兵庫県にお住まいの一般成人225人である。聞き取り調査は大学生3人、大学院生1人、学校教員15人、一般成人41人（計60人）であるが、本稿考察に必要不可欠である内容を適宜抽出し引用・分析する。

[6]「エスニシティ」ということば一般的に難解な学術用語として扱われる傾向があり、その概念も広範囲である。在日社会では「エスニシティ」よりも「民族性」ということばが広く用いられているのでアンケートでは「民族性」ということばを使用した。

が、本稿で扱っているテーマ研究（アンケート）は、被調査者コミュニティにおいてはじめて実施されたということ、朝鮮大学校生、朝鮮学校教員、被調査者コミュニティに絞った一般成人をはじめて網羅したことに学術的意義があろう。

研究方法としてはアンケート、聞き取り調査、関連する先行研究と文献などを織り交ぜながら分析を行う。

紙幅の関係上、本稿（1）では冒頭の keywords の内、「language、recognition of history、school」を扱い分析を行い、他の「eating habit、nationality、blood relationship、ceremonial occasion、name、folk costume」は、次号の多摩大学研究紀要「経営情報研究」NO.20 にて「「在日」とエスニシティ（2)」として掲載する。

「ethnicity」は「民族性」と訳される場合もある。「エスニシティ」という語については、社会学や文化人類学などの領域における研究者によってさまざまな議論がなされている。綾部恒雄（平成 18）は「エスニック集団が表出する心理的・行動的性格の総体」と定義しながら「エスニック集団ないしはその構成員が表す心理的・社会的現象」としている。本稿では綾部の定義とともに、国民国家内においてエスニック・マイノリティとして存在している集団であり、マジョリティとは違う「我々」意識ないしアイデンティティを共有しているグループであり、出自、言語、文化、歴史認識などにおいて絆や共通項を共有していると認識している人々（集団）における主観的および客観的な属性と表象の総体を指すことばとして用いる。

2．先行研究、そして「グラフ」化を通してみる調査結果

セボルト W. イサジフ（1996）は、エスニック集団の属性に関する研究を行っている。検討した 27 の定義の中から、12 の属性を言及された回数と共に公表している（表 1)。そのような結果としてイサジフは、エスニシティについて「共通の先祖を起源とし、同一の文化的特性を持ち、また同胞意識および「ゲマインシャフト[7]」型の諸関係を持ち、また移住者という背景があり、上位社会内で少数派あるいは多数派の位置にあるような人々の集団、あるいは範疇である」と定義している。

この定義をもとに在日コリアンを検討してみると、あてはまらない部分もあるのではないか、と考えられる。あてはまらない部分としては、たとえば一世の場合「共通の先祖・同一文化」という考え方が当たり前のように受け入れられる土壌があったが、「国際結婚の増加により、共通の先祖や同一文

表 1　エスニック集団の属性

属　性	言及回数
1．共同の国あるいは地域の出身者あるいは共通の先祖	12
2．同一文化あるいは習慣	11
3．宗教	10
4．人種あるいは身体的特徴	9
5．言語	6
6．同類意識:「われわれ意識」、同胞意識と忠誠	4
7．ゲマインシャフト的諸関係	4
8．共通の価値観あるいはエトス	3
9．独自の制度	3
10. 少数派ないし従属的地位あるいは多数はないし支配的地位	2
11. 移民集団	1
12. その他	5

[7] ゲマインシャフトとは、社会集団の基本的類型の1つで、家族・村落など人間の本質的な意思で自然にできる社会集団（共同社会）を指す。共通の利益を目的として結びついた集団を指すゲゼルシャフト（利益社会）と対をなす集合態型の社会型。

化という規定や範疇が当てはまるのか」、「在日はゲマインシャフトなのか」、「在日を一般的な移住者と見なせるのか」ということをあげられよう。

ここで、在日コリアン問題をエスニシティと絡めた先行研究の中からいくつかを紹介してみたい。前田達郎（2005）の「「在日」はエスニシティなのか？」という問題提起に集約されるように、近年、エスニシティ論を持って在日を捉えようとする傾向があることは否定できない。

金泰泳（1999）は、コーエン、バルト、イサジフ、シルズ、ギアーツ、デヴォスをはじめとする著名なエスニシティ論を概観し、その後、ホブズボウムやアンダーソンによるナショナリズム論などからの影響によるエスニシティ議論を整理、そして1990年代以降注目を集めだしたクレオール性やディアスポラ性を言及することによって在日朝鮮人問題への接近を試みた後、「現代社会と在日朝鮮人エスニシティ」と小題してアイデンティティ問題を扱っている。

徐京植（1998）は「同化」を否定し、権利を獲得しようとする立場から、在日をエスニシティという定規をもって考えることを全面賛成ではないにせよ肯定的に考えながら、文化還元主義になる恐れに対し警戒している。つまり、エスニックな朝鮮人とは誰なのか、文化を持っている人だ、となることへの警鐘である。

尹健次（1985）は「もともと、アイデンティティやエスニック、エスニシティという用語、それにマイノリティという単語ですら、片仮名書きで用いられざるをえないこと自体、それらが日本社会において抽象性・曖昧性・不明確性を帯びた言葉であることを示している。論者によってそうした言葉の使い方も微妙に違い、理論の組み立て方や、その理論によって日本社会を考察する角度や深度も大きく異なっている」と指摘している。

このようなさまざまな議論がある中で筆者は、いったい被調査者たちは自分たちの属性や文化、志向性などをどのように考えているのか、ということを共時的な一次資料としてまとめ、エスニシティであろうがネイションであろうが、議論を展開する上で欠かせない土台調査のひとつとしてアンケートの質問を投げかけてみた[8]。

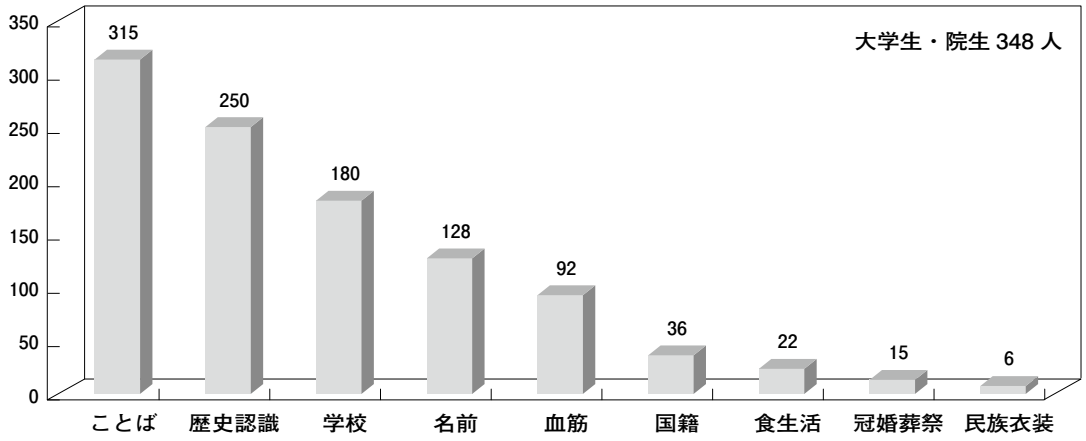
「グラフ１～3」を見ると、教員と成人の順番がまったく同じであるのに対して、大学生・院生との回答には若干の違いがあることを確認することができる。

「学校」と「歴史認識」、「血筋、名前、食生活、国籍」の順番に現れているが、言及数を考えれば大きな差異ではないと判断できる。「グラフ１～3」の回答をトータルデータとしてまとめたところ「グラフ4」のようになった。

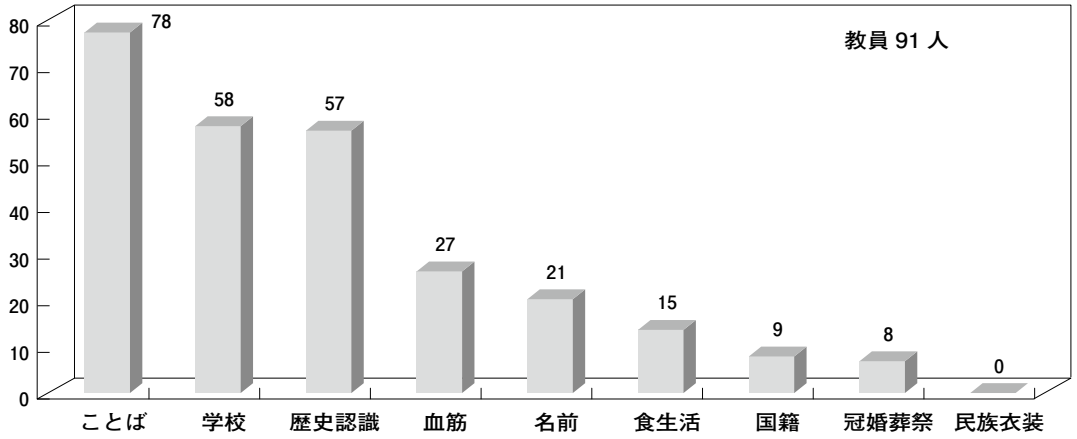
トータルとしては、1番「ことば」、2番「歴史認識」、3番「学校」、4番「名前」、5番「血筋」、6番「食生活」、7番「国籍」、8番「冠婚葬祭」、9番「民族衣装」の順番であるが、この順番は大学生・院生の結果と同じである。

[8] 塩川伸明（2008）が指摘するように、「国民/民族/エスニシティ」はまったく違う概念として用いられているが、日本語において「ネイション」は「民族」、「国民」という二通りの訳語が存在する。このことは小熊英二の指摘である「単一民族神話」の「定義」とあいまってより一層複雑化していると考えられる。

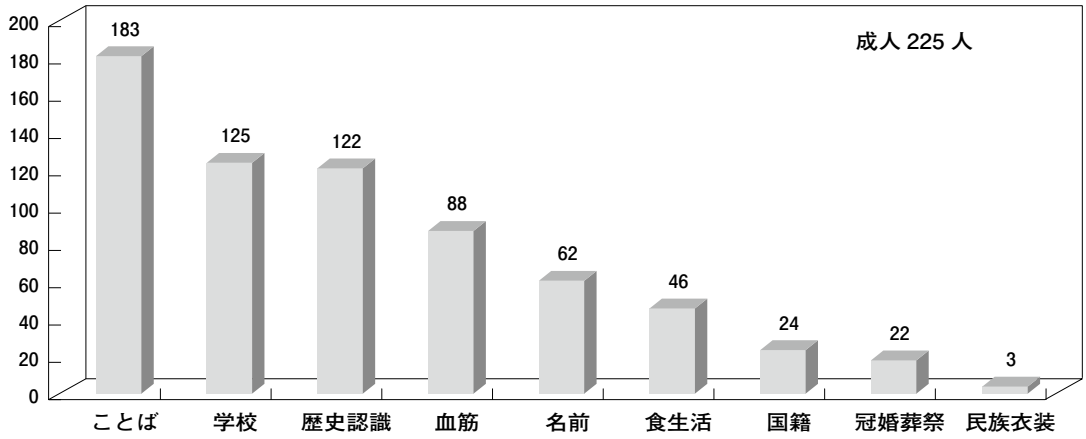
グラフ１：「在日にとって民族性の中で大切なのは（ことば、食生活、歴史認識、国籍、血筋、冠婚葬祭、学校、名前、民族衣装）の３つであると思われる。３つに○をつけてください」の結果データ（大学生・院生）



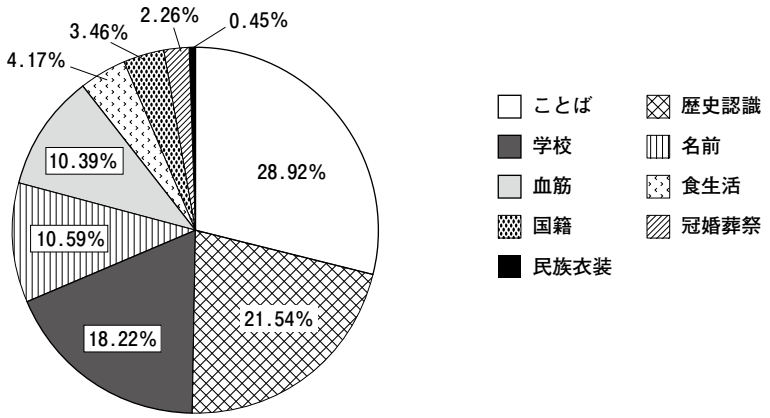
グラフ２：「在日にとって民族性の中で大切なのは（ことば、食生活、歴史認識、国籍、血筋、冠婚葬祭、学校、名前、民族衣装）の３つであると思われる。３つに○をつけてください」の結果データ（学校教員）



グラフ３：「在日にとって民族性の中で大切なのは（ことば、食生活、歴史認識、国籍、血筋、冠婚葬祭、学校、名前、民族衣装）の３つであると思われる。３つに○をつけてください」の結果データ（一般成人）



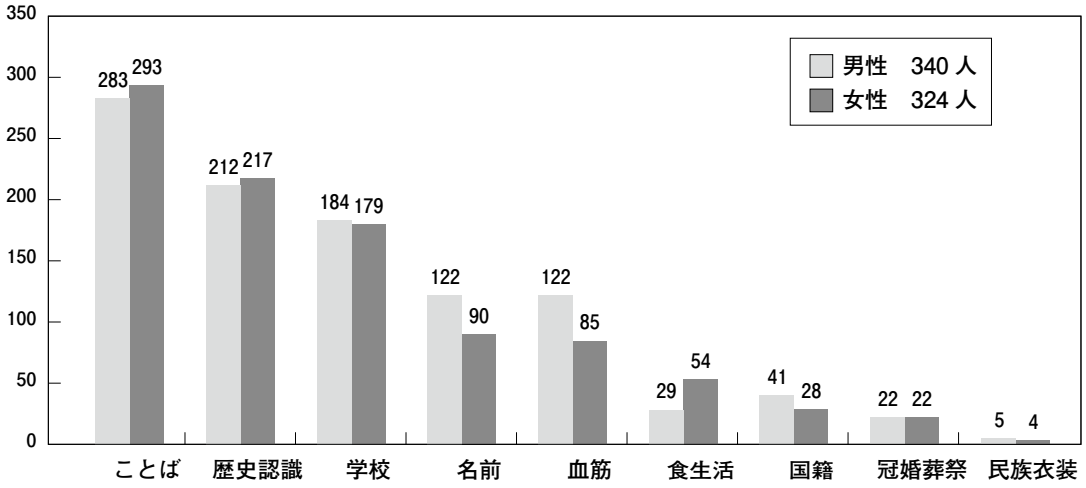
グラフ 4：「グラフ 1 ～ 3」のトータルデータ



（回答総数（1992 回答）を 100% とした場合における各回答のパーセンテージ）

考究の幅を求めようとする立場から、社会的・文化的性差としての「ジェンダー」という視点を加味しながらも分析を行う。したがってトータルデータを男女別に「グラフ化」したところ「グラフ 5」となった。

グラフ 5：「在日にとって民族性の中で大切なのは（ことば、食生活、歴史認識、国籍、血筋、冠婚葬祭、学校、名前、民族衣装）の 3 つであると思われる。3 つに○をつけてください」の男女別結果データ



「グラフ 1 ～ 3」、そして「グラフ 4」における回答順・言及数（%）を考えると、以下のように分類することも可能であろう。

A 群：「ことば、学校、歴史認識」、B 群：「名前、血筋」、C 群：「食生活、国籍」、D 群：「冠婚葬祭、民族衣装」

「グラフ 4」を見ると、A 群は全体の 68.68% を占め、B 群は 10% 台、C 群は 1 桁台、D 群はすべての被調査者層において最も回答言及数が少なく、しかも順位も各層ともに 8、9 番であ

るということ自体が各群の数値的特長であるといえる。したがってアンケート結果の詳細分析はＡ群、Ｂ群、Ｃ群、Ｄ群に分けて、そしてそれらに「グラフ５」の結果からジェンダーという視点を加味しながら行うこととする。

３.「ことば、歴史認識、学校」について

「グラフ５」が示している通り、「Ａ群」に男女別差異はほとんどない。このＡ群だけで全体の約 70% を占めた事になる。つまり被調査者コミュニティにおいては、ことば、歴史認識、学校（民族学校）を最も大切な事柄として認識していることになる。

現在の在日コリアンは、日本のある特定地域に集団として生活しているのではなく、散在している。在日人口は、大阪、東京、兵庫、愛知の順で多いが 47 都道府県すべてに居住しているし、各種データなどからも第１次産業としての農業、林業、水産業、牧畜業に従事している在日はごく少数であると考えられるので都市的環境にて生活しているといえよう。イームス／グード（1996）は、「言語はエシニシティと密接に関連している。言語はごく幼いときから、家庭という状況でまず習得され、文化の他の側面を伝達する主要メカニズムでもあるので、エスニック・アイデンティティの基本的源泉である」と指摘している。被調査者のコミュニティの場合、「家庭」を「学校」に置き換える必要があると考えられるが、いずれにせよ「言語」は、さまざまなエスニシティ論などからの考察でも明らかのように、共同体・同胞意識の構成要素の中でも中核的存在であるといえる。「ことば」を選択した人たちがアンケートに書き記した「理由」の中から、いくつかを紹介する。

△「ことば」に寄せた理由

大学生・院生

- ことば（の喪失）は文化の破壊であり民族性の喪失
- 朝鮮語を使えるということは朝鮮人として自己を表現できるということ
- ことばを知ることによって感じることができる（民族的感情だと考えられる―訳者注）
- ことばは一番大切な民族文化
- 主観的ではあるが、ことばは外部との関係において自己を規定する役割もある
- 考えはことばによる、ことばによって考えのちょっとしたニュアンスも変わり得る

教員

- 民族語によって民族式思考方式が形成される
- ことばの喪失は同化への赤信号
- 民族性を育むことばが重要
- ことばを習得することによってつまらないコンプレックスを感じなくなる

一般成人

- 植民地時代この3つ（ことばと名前と歴史認識）を奪われたから
- ことばは精神
- 日本で朝鮮語を継承する必要性から
- 自己ルーツと直接対話するため

被調査者各層（大学生・院生、教員、成人）において、「ことば」という選択回答が最も多かっただけでなく、全体の28.92%を占めたが、「理由」に書かれた見解はそれを裏付けているのではないだろうか。この「ことば」と3番目に言及数が多かった「学校」は不可分な関係性を有するので、アイデンティティと絡め、後でもう少し分析を深めることとする。

次に回答が多かった「歴史認識」を分析してみる。聴き取り調査によると、すべての被調査者たちが「自分たちは誰なのか、なぜ日本に住んでいるのか、どのような歴史的経緯・経験を経ているのか」ということを「歴史認識」と考えているとなった。

歴史学者の上田正昭（京大名誉教授）は、韓国併合という「『負の遺産』を将来にどう生かすかが問われている」としながら、「高校の歴史教師時代、在日生徒が荒れることに悩み、生徒らの心に過去の植民地支配から続く日本人の差別意識が深く影を落としていることを知った」(朝日新聞09年6月10日付「ひと」）という。確かに歴史に関するさまざまな問題が、現在も在日に何らかの心的影響を与えていることは間違いない[9]。そのようなことを踏まえ、まずは「歴史認識」を選択した人たちがアンケートに書き記した「理由」と聴き取り調査の中から、いくつかを紹介する。

△「歴史認識」に寄せた理由

大学生・院生

- 過去に暗ければ未来に対しても暗くなる
- 自己存在認識に歴史認識は欠かせない
- 歴史認識は社会生活を営む上で方向性を暗示する
- 自己のアイデンティティは歴史認識から出発する
- 在日が歩んできた歴史に対する認識によってルーツを強く守れる
- 歴史を知ることは日本で民族性を維持していくことでもある
- 何が大切なのかを理解できるから
- 日本で生活する上で歴史認識がなければ前進がない

教員

- 自己存在の証である

[9] 映画「パッチギ」の監督である井筒和幸（2007）は、在日コリアンと日本人の真の相互理解のためには、歴史と真実を知ることが重要であると述べている。

• 在日が歩んできた歴史を知らなければ日本で民族はなくなると考えられる
• 歴史認識によって我々は日本で名前（朝鮮本名）を守っていける
• 自分の出自を否定したり隠したりすることはだめだし、悲しい
• 在日が歩んできた歴史を知り、胸張って堂々と生きるか、縮こまるかは教育次第

一般成人

• 現代史の流れの中で自分が立っている位置を確認しなければならないから
• 歴史認識は自分の根本出発点
• 正しい歴史認識は個人の行動を左右する原動力になりえるから
• 根っこ（ルーツ）が腐ったり丈夫でなければ、枝も細り花も咲かない
• 在日社会の存続と発展のためには必要不可欠
• 我々の存在は帝国主義時代、植民地略奪時代、つまり近代史から始まったから
• 戦後日本にて植民地歴史が歪曲され続けてきたが、これは在日存在の否定歪曲でもある

このような「理由」は、「歴史認識」が在日の出自（ルーツ）にかかわっていると考えている人が多数を占めると解釈できよう。

一般的に「出自」は、エスニシティあるいは民族という概念形成にとって重んじられる事柄であり、これらが政治的統合の手段として利用されることによって「国民」概念へと昇華される傾向がある。しかし在日コリアンは、一般的な「国民」や「移民」とは区別される傾向があり、枠組みと集団概念を定立することの難しさがあるように思われる。

被調査者コミュニティでは、朝鮮民族の一員ではあるが朝鮮半島に住む民族構成員とは異なる要素を含んだ在日コリアンであるという意識が働いている。そして自らをコリアン系日本人とはいわない。またエスニシティ論を持って在日を捉えようとするものの、うまくピタッと当てはまるような議論はいまだ展開されていないと考えられる[10]。

民族の出自は、どのように扱うかによって観念的で偏ったナショナリズムやナショナリティ問題を表出させる場合がある[11]。ゲルナー（2007）、小熊英二（1995）、姜尚中（2004）、子安宣邦（2007）が指摘するように、民族の神話や起源、それらが「国民的物語」に彩られた共同体意識として、また恣意的な歴史的作り物であるはずの文化的断片や破片がナショナリズムに有効利用される可能性もある。エスニシティ、民族、ナショナリズム、ナショナリティ、いずれにしてもこのような議論は、民族、あるいはエスニック集団の捉え方、つまり成立・存続要因や本質の分析に関する議論を展開させる。

[10] 吉野耕作（1997）はエスニシティ（エスニック・コミュニティ、またはエスニック・グループ）について、第1の用法「少数民族あるいは移民・移民集団を意味する（たとえばバスク民族、日系アメリカ人など）」、第2の用法「近代的ネーションの成立以前に存在する何らかの共同体、つまり近代的ネーションの原型を意味する場合がある（たとえばシェークスピア時代のイングランド、植民地時代以前のベトナム等）」と指摘している。

[11] ナショナリティ（Nationality）は一般的に国民性、民族性、国籍と訳されているが、デイヴィド・ミラー（2007）は、ナショナリティにおける5つの特徴、ナショナル・アイデンティティの諸問題などについて分析している。また塩川伸明（2008）もナショナリティについて言及しているが「その使い方は国と時代によって異なる」と述べているので参照されたい。

吉野耕作（1997）は、議論の対立視点として「原初主義（primordialism）と境界主義（boundary approach）」、「表出主義（expressivism）と手段主義（instrumentalism）」、「歴史主義（historicism）と近代主義（modernism）」という対抗軸を設定し分析を行っている。しかし、被調査者コミュニティにおけるアンケート結果（理由）は、「ルーツ」が原初主義なのか近代主義なのかという、二項対抗軸に関する議論が必要ではないかと筆者は考えている。このような視点は、その他大勢の在日コリアン・オールドカマーにも適用できると判断される。

まずは、原初主義の議論には欠かせない「原初的絆」、もしくは「感情的紐帯」として文化の範疇に属する特徴である言語、信仰、習慣などを排除し、「出自」、「ルーツ」に絞っての原初主義考察、その後、近代主義に関する理論を、在日コリアン（被調査者）の形成過程とアンケートに書かれた「理由」分析などから考察してみることとする。

原初主義において民族とは、民族共同体の過去、現在、未来における時間的連続性を重視することによって、歴史的起源と文化的特質の同一性が渾然一体となって存在する民族共同体であると考える。

被調査者たちは、民族性の中で重視する事柄として、「ことば」の次に「歴史認識」をあげている。この「歴史認識」は、自分たちの出自・ルーツが植民地朝鮮であるということから出発しているということが、アンケートと聴き取り調査から伺える。出自・ルーツ意識が、被調査者におけるアイデンティティの根幹であると分析することもできる。

被調査者のほとんどが、今日の韓国の地出身者の子孫であり、朝鮮学校にて学んだ経験を持つ。しかし朝鮮半島南北に現在の国家が創建される以前から在日として存在してきたということに着目する必要があろう。したがって対立と排除によって選択される一方の国家（北か南か）に強烈な原初主義を求めているのではないと考えられる。このことは北海道朝鮮初中高級学校を題材にしたドキュメンタリー映画「ウリハッキョ」の中で、ある学生のお祖母さんが韓国人映画監督に、「普通の人（在日）の考え方は、韓国も我が祖国、北も共和国も我が祖国、そのように考えている人たちがたくさんいますよ」ということばに集約されていると考えられる[12]。

冷戦構造により構築された選択的国家帰属意識ではなく、自分たちはあくまでも植民地朝鮮から渡ってきた朝鮮人集団（在日）であるという認識と、それに伴う共通的コミュニティ・アイデンティティが育んできた「歴史」を大切にしようとする意思がアンケート調査結果に現れていると分析するべきであろう。

この「歴史」は北東アジア（植民地朝鮮、日本、韓国、北朝鮮）における近・現代史でもあり、在日コリアン史でもある。これを自分たちの民族性の中で大変重要視しているということになる。すなわち被調査者コミュニティの人たちにとって「原初主義」は在日の「始まり」、自分たちが日本に渡ってきた問題と捉えているということであるし、この「原初主義」を「歴史認識」と置き換えることも可能であると分析できよう。

極端な原初主義を唱えることは、民族の「自然性」を前提にし、戸坂潤（1977）が指摘する

[12] ドキュメンタリー映画「ウリハッキョ」（韓国のキム・ミョンジュン監督作2006年）と「60万回のトライ」（韓国パク・ユサ、在日パク・トンサ監督作2013年）、映画「パッチギ！」（井筒和幸監督作品 2005年公開）及び続編「パッチギ！LOVE&PEACE」（2007年公開）は被調査者コミュニティを扱った映画である。

ように観念論と解釈哲学、そして文学主義と文献学主義にまで裾野を広げる。そして「自明な普遍原理」へと押し上げられる可能性もありえないわけでもない。しかし被調査者を含む在日コリアン・オールドカマーの場合、自然性による集団形成ではない。始まり（原初）には個人差はあるにせよ、1910 年～ 1945 年であると明確なため、観念による恣意的解釈を挟む余地はない[13]。在日コリアン・オールドカマーという集団の形成時期が明らかなことは「近代主義」にもつながると考えられる。

欧米列強によるアジア進出に危機感を募らせ、東アジアにおいていち早く天皇制による近代国家を創り上げ脱亜入欧をめざし、自らも欧米列強と肩を並べようと日清・日露戦争を経て植民地獲得に成功した近代日本、その後、日韓併合条約から太平洋戦争への歴史的流れを、在日という自らの存在理由として被調査者コミュニティは受け止めている[14]。

ここで筆者が言及したい近代主義とは、歴史主義との対立視点として考えられる近代主義である。民族（あるいはエスニック集団）は、近代との断絶を拒否し古いものだとする歴史主義ではなく、近代化の過程において新たに構築されたものだということである。近代的な「構築」には人為性を無視できない。近代史は「自然」ではなく、国家であろうが思潮（西洋主義、国粋主義、帝国主義、マルクス主義など）であろうが、人為性を抜きに語れない。在日コリアン・オールドカマーは、人為的「操作」による近代が産出させた集団であるという意味で近代主義との接点があるといえよう。このことによって被調査者コミュニティを含む在日コリアン・オールドカマーは、ルーツという観点での原初主義、そして近代史の産物という近代主義が渾然一体をなす存在だといえる。つまり原初主義か近代主義かという 2 項対抗軸理論ではなく、2 項融合論によって民族もしくはエスニック集団を捉えなければならないという新たな論点を提起させる。この 2 項融合論（対抗軸融合論）の妥当性は、「在日が歩んできた歴史に対する認識によってルーツを強く守れる」、「自己のアイデンティティは歴史認識から出発する」、「歴史認識は自分の根本出発点」、「我々の存在は帝国主義時代、植民地略奪時代、つまり近代史から始まったから」をはじめとするアンケート結果（理由）に明らかに反映されている。このような傾向は、「ことば」に関する調査にも現れていると分析できる[15]。

ここまでの考察によって、被調査者を含む在日コリアン・オールドカマーの場合、既存の民族理論やエスニック集団区分だけを持って考えるのでは不足があると分析できよう。そこでポストコロニアル・マイノリティという議論を呼び起こす。

次に、アンケートにおいて 3 番目に回答が多かった「学校」を見てみる。ここでの学校とは民族教育としての朝鮮学校を指す。アンケートのトータル結果（グラフ 4）においては、2 番「歴史認識」、3 番「学校」となったが、教員と成人の結果は「学校」が 2 番となった。つまり

---

[13] 終戦後、一旦朝鮮半島に戻ったが、済州道4.3蜂起など朝鮮半島混乱期に再び日本へ戻ってきた人たちなども存在するが、「ポストコロニアル（小森陽一（2001））」状況という視点を前提にしている。

[14] 内地拡張としての「蝦夷から北海道」、「琉球から沖縄」という視点も無視できない。

[15] 鈴木道彦（2007）は「日本が1910年の「韓国併合」よりはるか以から、虎視眈々として進出を狙い、着々と支配体制を固めていたこと、併合後は農民から土地を奪って莫大な数の貧民群を作り上げる一方、「同化政策」を遂行し、とくに第二次世界大戦に突入すると、「内鮮一体」、「皇民化」のかけ声の下に、朝鮮人に「皇国臣民」であることを要求したり、「日本語普及運動」と称して学校では朝鮮語の使用を禁じたり、「創氏改名」と称して日本名を強制したことなどは、今さら言うまでもないことだが、基本的な常識としておさえておきたい。在日朝鮮人とは、まずこのような植民地支配によって作り出された存在である」と述べている。

重要度において、2番と3番は甲乙付けがたいといえなくもない。アンケートに書かれた「理由」と聴き取り調査過程において聞くことができた「意見」には共通点が多かった。ほとんどの「理由」は、以下に紹介する見解に収斂させることができる。したがって被調査者層に分けずに公表する。

△「学校」に寄せた理由

• 朝鮮語と歴史認識を教えるのは学校である。
• 学校がなければ日本（在日）で朝鮮語が激減する
• 在日同胞社会の未来を育てるから
• 学校教育は自己アイデンティティを左右するし、自尊心も左右する
• 自分たちのルーツに誇りを持つためには民族教育が大変重要である
• 学校は人間形成において最も重要な空間
• 朝鮮学校は朝鮮の歴史や地理と日本の歴史や社会も学べるのでバランス感覚を養える
• 学校で学べば冠婚葬祭や食生活、民族衣装や民族楽器など、民族をトータルに学べる
• 最近感じることは学校抜きに日本で民族性はないということ
• 学校は同胞社会の拠点
• 学校がなくなれば民族性を重視する在日コミュニティがなくなる
• 学校生活自体が民族性を育むところ
• コンプレックスと差別に打ち勝ち、堂々とした朝鮮人に（子どもが）育って欲しいから
• 朝鮮学校は100%本名である、つまり自分を隠す必要がないから
• 日本の学校では在日同士の繋がりや付き合いが少なく、結婚相手も日本人が多いから
• 朝鮮学校（幼稚園から大学まで）の歴史は本国（南北）だけでなく、世界に誇れる宝
• 朝鮮学校が歩んできた道のりは、我々在日同胞が歩んできた道であるので愛着がある
• 植民地の民が、旧宗主国に体系的な学校を持っていること自体が奇跡であり矜持である
• 在日はすべての財産を失っても、学校だけは守らなければならないと考えるから
• 学校がどんどん閉校しているから

朝鮮学校は、イマージョン教育を行うことによってバイリンガル人材を育成しているが、他の少数言語を教える、あるいは重視するコミュニティとの差異はあるのだろうかという疑問が浮上する。比較によって相対的なものの見方、朝鮮学校の特殊性あるいは普遍性が議論できよう。このような疑問にはジム・カミンズ／マルセル・ダネシ（2005）が参考になり比較資料にもなる。若干、引用が長くなるが継承語（教育）とアイデンティティに関する部分を抜粋し、比較参考資料として紹介する（括弧（　）の数字は抜粋ページ）。

•「児童生徒個人のアイデンティティを否定する学校教育の対応が問題（87）」
•「継承語の振興は多文化主義の不可分な部分（90）」
•「家族のルーツ、伝統、文化との結びつきを強めるために子どもに豊かな教育体験を与える

ことは、自分自身を大切だと思う態度、自負心、自尊心を養うことにつながる / 子どものルーツとは、子どもの存在そのものであり、絶対に欠かせない中核の部分（91）」

- 「子どもが保育園・幼稚園、小学校、中学校、高等学校を通じて自らの言語や文化は校門のところに置いて入るべきものという明白なメッセージを受け取るとき、教育制度はその子の全人教育を否定したことになる。子どもが自らの文化的ルーツに対する理解を深めるためには継承語を伸ばすことが何よりも重要（91）」
- 「自分のルーツに対する自信と誇りこそ、われわれが子どもたちに与えることができるもっとも価値あるもの（92）」
- 「コミュニティの存続は、帰属意識を持続する次世代、または部分的にでも持続する次世代にかかっている（97）」
- 「世界の多くの国で（日本も含めて）少数言語児童生徒の継承語問題がほとんど無策に等しい状況に放置されている（167 の「本書の解説にかえて（中島和子）」より抜粋）

これらの資料抜粋とすでに紹介したアンケート結果（理由）を交互に眺めると、共通点があることが伺える。共通キーワードとして「ルーツ、アイデンティティ、継承語（少数言語）維持、コミュニティ（の存続）、自尊心、自負心（＝堂々）」を抽出できる。玄武岩（2007）は「在日コリアンが民族教育や文化活動をとおして民族的に生きているのは、韓民族という共同体的な実体を具現しようとするためではなく、韓国人・朝鮮人としての主体的なアイデンティティをもって生きていくためなのである」と指摘しているが、玄がいう主体的なアイデンティティとは、固定的な国家国民的アイデンティティではなく、越境者、そしてポストコロニアル・マイノリティとしてのアイデンティティの希求であるとも解釈できよう。

状況により違いはありえるが、エスニック・マイノリティにとって「ことば（継承語）」は自己のアイデンティティとあいまって、自分を隠すことなく堂々と生活してゆく中で切実な問題として横たわっていると考えられる。そしてアンケート結果における「ことば」と「学校」の回答は、不可分の関係にあると分析できよう。

次号の多摩大学研究紀要「経営情報研究」No.20 につづく。

参考文献

（1）第 14 回（平成 25 年度）大阪大学課題研究奨励費研究成果報告書「朝鮮学校へのフィールドワークを中心とした在日コリアン・コミュニティ研究」

（2）綾部恒雄（平成 18）「エスニシティ論」、綾部恒雄［編］（平成 18）『文化人類学 20 の理論』179 ～ 196 頁

（3）朴浩烈（2011）「文字理解に伴う言語能力と動態的特徴を示すバイリンガリズム」神田外語大学韓国語学会『韓国語学年報』7 号 35 ～ 52 頁

（4）セボルド W. イサジフ（1996）「さまざまなエスニシティ定義」、青柳まちこ［編・監訳］（1996）『エスニックとは何か―エスニシティ基本論文選』85 ～ 56 頁、新泉社

（5）前田達朗（2005）「「在日」の言語意識―エスニシティと言語」、真田信治／他［編］（2005）『在日コリ

アンの言語相』87 ～ 114 頁、和泉書院
（6）金泰泳（1999)『アイデンティティ・ポリティクスを超えて―在日朝鮮人のエスニシティ』世界思想社
（7）徐京植（1998)「引き裂かれた者たち―徐京植さんに聞く―」『ほるもん文化』8 新幹 11 ～ 40
（8）尹健次（1985)「異質との共存―民族的自覚へのひとつの回路」『思想』730 号：168 ～ 189
（9）塩川伸明（2008)『民族とネイション―ナショナリズムという難問』岩波新書
(10) エドゥイン・イームス／ジュディス・G・グード（1996)「都市におけるエスニック集団」（青柳まちこ［編・監訳所収］）
(11) 井筒和幸（2007)『民族の壁どついたる！』河出書房新社
(12) 吉野耕作（1997)『文化ナショナリズムの社会学』名古屋大学出版会
(13) デイヴィッド・ミラー（2007)『ナショナリティについて』富沢克／他［訳］ 風行社
(14) アーネスト・ゲルナー（2007)『民族とナショナリズム』加藤節［監訳］ 岩波書店
(15) 小熊英二（1995)『単一民族神話の起源』新曜社
(16) 姜尚中（2004)『反ナショナリズム』教育資料出版社
(17) 子安宣邦（2007)『日本ナショナリズムの解読』白澤社
(18) 戸坂潤（1977)『日本イデオロギー論』岩波文庫
(19) 小森陽一（2001)『ポストコロニアル』岩波書店
(20) 鈴木道彦（2007)『越境の時― 1960 年代と在日』集英社新書
(21) ジム・カミンズ／マルセル・ダネシ（2005)『カナダの継承語教育―多文化・多言語主義をめざして』、中島和子／高垣俊之［訳］ 明石書店
(22) 玄武岩（2007)『統一コリア―東アジアの新秩序を展望する』光文社新書

＊新聞資料：朝日新聞